

## そのまま、じつとじて

(ヨハネ一五・一〜八)

中国では富裕層を中心に日本産の果物が大人気。「ふじ」も「ジョナゴールド」も「王林」も中国産のものもあるのだが、消費者は高くても日本産を求める。秘密はそのずば抜けた品質。リンゴは大きく、ブドウは型良く、ナシは瑞々しい。外国で過ごした6年間、「国光」のような小粒のりんごばかり食べていた身としてはさもありなんだ。その品質を支えているのは農家の方々の手間暇である。あるぶどう農家のHPにその栽培過程が出ていたが、美味しいぶどうを実らせるためには剪定、芽かき、摘房、粒抜きといったる刈り込みが不可欠なのだそう。農家の皆様の仕事には本当に頭が下がる。GJである。

閑話休題。旧約聖書ではよくぶどうをイスラエル民族を示す象徴に用いているが、今朝の個所においてイエスは自らをぶどうの木、私たち信者を枝、そして父なる神を農夫に例えている。以下に結実の人生を送るために農夫である神の仕事と、私たちがなすべきことについて考えてみたい。

### 一、結実のために刈り込む神

ここでイエスは神を農夫になぞらえ、彼がすることを明らかにしている。一言でいえばそれは刈り込みなのだが、それはさらに二段階に分けられている。

第一段階は実を結ばない枝の除去であるが、これはキリストに対する忍耐強い信仰と愛から生まれる霊的生活を捨ててしまった人のことを指す。そうした枝は木に余計な負荷をかけているから、結実のためには不要のものである。更に六節を読むと除去された枯れ枝は火で燃やされてしまうことが書かれている。この「集められ、焼かれる」という比喻が裁きを表していると考えるのはバプテスマのヨハネの説教を見ても(参：マタイ三・一〇、一一)明白である。

第二段階の刈り込みは実を結ぶ枝に対しても行われる。収量を増やし、高品質の実を生み出すためには、どうしても何度か何度も刈り込むことが必要なのだ。時にこの箇所を読むと無理からぬことではあるが、刈り込まれる側に感情移入してしまうことがままある。だがこの動作主はあくまでも農夫になぞらえられる父なる神であることを覚えるべきである。偉大にして良いお方である神ご自身が私たちの人生を最良のものにするよう働いてくださる。そう考える

とき、私たちはその力と愛に信頼して刈り込みに身を委ねることが出来る。

### 二、結実のためにとどまるべき人間

このように神は熟練した農夫のように、また豊かな結実のためにぶどうの木の枝の一本一本になぞらえられる私たちに必要な刈り込みをしていくのだが、これを可能にするために私たちは四節の命令を守らねばならない。つまりキリストにとどまるといふことである。もし植物であれば、外力が働かない限り枝が木を嫌って離れるといふことはない。だが私たちは人間だ。一時はイエスを信じ、その弟子であることが告白したとしても、信者であることをやめることは可能だ。日本でも有数の歴史を誇るプロテスタント教会で一人の求道者が信仰を持ち、教会を去るまでの年数を調べたところ三年に満たないという数値が発表された。勿論これをもって日本の全教会がこうだということは到底出来ないが、キリストの体である教会から離れ、信仰が枯れる人は確かにいる。イエスはそれを戒められ、キリストの愛のうちに、またキリストの体なる教会に居続けることを求められた。いやになることがあっても、自分の思いが通らないことがあっても、私たちがキリストに留まっていくなるとき、父なる神はすべてのことを働かせて私たちの枝

ぶりを揃え、結実を保証して下さるのだ。

\* \* \*

牧師の父と教師の母に生まれた三男坊の彼は中米はカリブ海に浮かぶ島の賛美のあふれる教会で育った。五歳から少年劇団に入り、十二歳で本格的に歌を習い、大学時代には政府主催のコンテストに出るまでになった。だが卒業後はニューヨークで一旗揚げようと準備をしていた時に想定外の出来事が起こる。恩師が「日本に行つて英語を教えてはどう」という話を持ってきたのだ。彼は「えっ？日本？『おしん』の国？どうして？」と思ったそうである。予想だにしない展開だった。しかし彼はその要請を受け取り、単身杜の都仙台に降り立った。ゴスペルを通して福音を知ってもらおうと奮闘したが、二〇一一年には大震災の被災者になってしまった。故郷の母は心配し「帰つておいで」と電話口で言った。しかし彼はとどまることを選び、被災者たちに「神はいつも良いお方」であることを証しし続けた。そんな謙虚で明るく、キリストのもとに留まり続ける「ゴスペル王子」ことジョン・ルーカスさんの人生には確かな「結実」がある。私たちがキリストに留まろう。結実の人生、神の栄光を表す生はそこにある。